

ガレノスとアスクレピオス

土屋 睦廣

はじめに

今回の報告では、古代ギリシア・ローマにおける癒し手の代表として、ガレノスとアスクレピオスを探り上げる。ガレノスは合理的・科学的医学の代表、アスクレピオスは非合理的・宗教的癒しの代表と言えるだろう¹。もちろん、これではあまりにテーマが大きすぎるので、ここでは両者に関わる一つの問題を提起して、それを中心に論じることとする。以下に見るように、ガレノスは当時としては相当な合理主義的精神の持ち主であったにもかかわらず、アスクレピオスを崇拜し、その夢のお告げを信じていた。合理的医学とアスクレピオスへの信仰は、ガレノスにおいていかにして両立しえたのか。この問題を考えてみたい。

1. アスクレピオスの癒し

それでは、ガレノスの検討に入る前に、まずアスクレピオスの癒しがどのようなものであったかを見ておこう²。アスクレピオスの名はすでにホメロスにも見られるが³、アスクレピオスの生い立ちに関する最も古い資料はピンダロスの詩である⁴。それによれば、アスクレピオスはアポロンとテッサリア王プレギュアスの娘コロニスの子で、コロニスは妊娠中に不貞を犯したためにアポロンに射殺される。我が子を不憫に思ったアポロンは火葬にされる母親の胎内から子供を救い出し、ケンタウロス族の賢者ケイロンに託して医術を学ばせた。かくして、アスクレピオスは名医となり人々を癒すが、金銭に目がくらみ、死者を生き返らせるという不遜を犯したために、ゼウスの雷霆によって撃ち殺されたという。アスクレピオスは蛇遣座になったという後代の伝説⁵も有名である。

アスクレピオスの祭祀を確認できる最古の考古学的遺物は、前5世紀初頭のものとされている⁶。アテナイには、ペロポネソス戦争中のニキアスの和約が成立して間もない前420/19年に、エビダウロスから移入された⁷。前399年に刑死したソクラテスの最後の言葉が、アスクレピオスに鶏を捧げてくれというものであったことはよく知られ

¹ 非合理的な癒しとしては、アスクレピオス信仰とは別に、呪術的な癒しの民間信仰があったことが想定できる。しかし、呪術的治療は、ほぼ同時期に誕生し発展したアスクレピオス信仰と合理的医学の双方から排撃される立場にあったと考えられる。Cf. V. Nutton, *Ancient Medicine*, London 2004, pp. 113-114.

² 以下、アスクレピオスに関する碑文・原典資料については、おもに次の二著を用いた。F. Hiller von Gaertringen, *Inscriptiones Graecae IV, 1², Inscriptiones Argolidis, Fasc. 1, Inscriptiones Epidauri*, Chicago 1977 (*IG IV, 1²*と略す); E. J. & L. Edelstein, *Asclepius: Collection and Interpretation of the Testimonies*, Baltimore 1998 (Edelstein と略す)。

³ ホメロス『イリアス』II, 731; IV, 194; XI, 518 = Edelstein, T. 10, 164, 165。「非の打ち所のない医師」と言われているが、いまだ神格化されていない。なお、アスクレピオス以前の信仰治療、および、神格化される以前のアスクレピオスについては、cf. Edelstein, II, pp. 1-64; 馬場恵二『癒しの民間信仰 ギリシアの古代と現代』東洋書林, 2006, pp. 141-216.

⁴ ピンダロス『ピュティア祝勝歌』III, 1-58 = Edelstein, T. 1. 他の諸説については、cf. Edelstein, T. 2-120.

⁵ Cf. Edelstein, T. 121-122.

⁶ エビダウロスのアスクレピオス神域から出土した青銅杯に刻まれた銘文 (*IG IV, 1², 136*)

⁷ Cf. Edelstein T. 720-732; 馬場前掲書, pp. 237-279.

ている¹。続く前4世紀には、アスクレピオスの祭祀はギリシア各地に広まって、古代末期に至るまで盛んに崇拜された²。ローマにも、疫病が流行した前293年にエピダウロスから移入され、ティベリス（現テヴェレ）川の中州の神殿に分祠された³。

周知のように、ペロポネソス半島のエピダウロスには、アスクレピオス信仰の中心地となった壮大な神域があった。ここから出土した4本の石碑には、前4世紀後半の書体で数多くの「癒しの事績(ἰάματα)」が記されている⁴。神殿において実際にどのようなことが行われ、それがどれほど実効を持っていたのか、確かなことはわからない。以下に掲げる事例にも見られるように、「癒しの事績」の多くは現実にはありえない奇跡譚である。これらすべてが神殿当局による創作・捏造である可能性は否定できない。しかし、今日研究者の多くは、これらには患者本人の宗教的体験が反映されていると考えている⁵。同様の報告がエピダウロスの石碑以外の多くの碑文・文献にも見られることから、これらが当時多くの人々によって事実であると信じられていたことは疑いない。

それらによると、多くの場合、癒しのために神域を訪れた「嘆願者(ικέτας)」と呼ばれる人たちは、「アバトン(ἄβατον)」（立ち入りできないところ＝至聖所）と呼ばれる施設で眠りに就き、夢に神が現れて治療を施し、目覚めたときにはすっかり治癒していた、と伝えられている。内容がおおよそ判読できる51例のうち、40例で嘆願者が眠りに就いたことが語られており、そのうち35例に夢が語られている⁶。夢を見た事例では例外なく神が夢に現れて⁷、何らかの治療を施したり、指示を与えたりしている。以下に典型的な例を二つ掲げる⁸。

〔事例9〕夢における薬剤治療

ある男が嘆願者として神のもとにやって来た。彼の片目はまぶただけで、その中には何もなく、全体が空洞になっているほどの有様だった。聖所にいた人たちの中には、彼の単純さを嘲笑する者もいた。目には中身が何もなく、空間だけしかないのに、見えるようになる信じきっていたからである。さて、眠りに就いた彼に幻影が現れた。神が何か薬を煎じて、それからまぶたを開かせ、その中に薬を注入したように思えた。夜が明けると、彼は両目とも見えるようになって出て行った⁹。

¹ プラトン『パイドン』118A。

² Cf. Edelstein T. 707-844, 馬場駒鶴書, pp. 311-391.

³ Cf. Edelstein T. 845-861.

⁴ 「癒しの事績」のテキストはIG IV, 1²に拠ったが、R. Herzog, *Die Wunderheilungen von Epidauros: Ein Beitrag zur Geschichte der Medizin und der Religion*, Leipzig 1931 と Edelstein のテキストと訳、馬場駒鶴書, pp. 218-235 の訳も参照した。4本のうち2本は損傷が激しい。Herzog はこれらから70の事例を読み取っている。

⁵ これらをめぐる解釈については、cf. Edelstein, II, pp. 139-182.

⁶ IG IV, 1², 123, XLIV の欠損箇所を補うのに、Hiller は夢の中の出来事としているが、ここでは Herzog に従って覚醒時の出来事と解する。なお、就寝に言及していない事例の中には、治療とは関係のない奇跡譚が2例 (IG IV, 1², 121, X; 123, XLVII) 癒されたが就寝に言及していない事例一つ (IG IV, 1², 122, XXXVI) が含まれる。夢に言及している35例には、癒しではなく、神が行方不明者の居場所を教えた事例 (IG IV, 1², 122, XXIV) と、亡夫が隠した黄金の所在を教えた事例 (IG IV, 1², 123, XLVI) が含まれる。

⁷ ただし、IG IV, 1², 122, XXXIX では神の代わり蛇が（あるいは神が蛇の姿をとって）現れる。

⁸ 見出しは筆者が付したもの。訳文中の（ ）内の字句は筆者による説明や訳語の補いである。以下同様。

⁹ IG IV, 1², 121, IX.

〔事例 13〕夢における手術

蛭を持ったトロネ（マケドニアの町）の男。この者は眠りに就いて夢を見た。神が胸をメスで切開して、何匹もの蛭を取り出し、彼の両手に渡して、胸を縫い合わせたように、彼には思えた。夜が明けると、彼はその生き物を両手に持ったまま出て行って、健康になった。彼が蛭を飲み込んだのは、継母に騙されて、飲み物に混ぜて入れられたそれらを飲んでいたのであった¹。

両者とも、明らかに非現実的な治療が述べられているが、投薬や手術が語られているのは、当時の世俗的・医学的な治療を反映したものとと言えるだろう。ただし、目覚めているときに癒しが行われた例も八つある。以下に短い例を二つ掲げる。

〔事例 16〕夢によらない癒し（とっさの行動）

跛のニカノル。彼が目覚めて座っていたとき、ある少年が杖をひたたくって逃げていった。すると、彼は立ち上がって追いかけていき、このことから彼は健康になった²。

〔事例 20〕夢によらない癒し（動物）

ヘルミオネ（アルゴリスの港町）のリュソン、盲目の少年。この者は目覚めていたとき神殿にいた犬たちのうちの1匹によって目を癒されて、健康になって帰っていった³。

事例 16 などは合理的にも解釈できる話であろう。無意識にとったとっさの行動によって障害が治癒するという同様の例が他にも二つある⁴。事例 20 には犬が癒し手として登場する。蛇と犬はアスクレピオスの使いとみなされていた聖獣で、これらの動物が患部を舐めることで癒しが行われる例が他にも四つある⁵。注目すべき点としては、このような夢を伴わない事例では、たいてい「目覚めて(ὄψαο)」という言葉で、癒しが覚醒時に行われたことがわざわざ言明されている点である。さらに、夢が述べられていない事例の中には、眠っても夢を見なかったので癒されなかったという例が二つある⁶。したがって、夢に言及されていなくても、眠って癒された事例には夢を見たことが暗黙の前提とされていたと考えられる。つまり、原則として、癒しは夢を通じて与えられるとされていたことがわかる⁷。

夢見に失敗した2例のうちの一つは、夢ではなく覚醒時に神が現れた唯一の事例として興味深いので、以下に引

¹ IG IV, 1², 121, XIII.

² IG IV, 1², 121, XVI.

³ IG IV, 1², 121, XX.

⁴ Cf. IG IV, 1², 121, V; 123, XLIV.

⁵ Cf. IG IV, 1², 121, XVII(蛇); 122, XXVI(犬); XLIII(鷺鳥); 123, XLV(蛇)。ただし、XVII では患者は眠って神に治療される夢を見る。他にも蛇が登場する事例としては、cf. IG IV, 1², 122, XXXIII; XXXIX; XLII.

⁶ Cf. IG IV, 1², 122, XXV; XXXIII。ただし、両者とも後に癒される。

⁷ 夢による癒しについては、cf. E. R. Dodds, *The Greeks and the Irrational*, Berkeley 1951, pp. 102-121; M. A. Holowchak, *Ancient Science and Dreams: Oneirology in Greco-Roman Antiquity*, Lanham 2002, pp. 151-164.

用する。

〔事例 25〕 覚醒時の神の顕現

ペライ(テッサリアの町)の女ソストラタは身ごもっていた。彼女は危篤に陥ったので、担架で神殿に運ばれて、そこで眠りに就いた。しかし彼女は、何も明瞭な夢を見なかったため、再び自宅に運ばれて行った。その後、コルノイのあたりで、彼女と供の者たちにある容姿端麗な男性が出会ったように思えた。その者は彼らの不運を彼らから聞き知ると、ソストラタを乗せて運んでいた担架を置くように命じた。それから、彼は彼女の腹を切開して、足洗い桶二つ分もの大量の小さな生き物を取り出した。腹を縫い合わせて、その女を健康にすると、アスクレピオスは自分が現れたことを明かし、平癒感謝の奉納品をエピダウロスに送るように命じた¹。

ただし、ここでも神の現れには、当事者たちに「~したように思えた(ἔδοξε)」というぼかした表現が用いられている。これは先に引用した事例 9 と 13 にも見られた表現で、「癒しの事績」に限らず、夢の内容を語るときのギリシア語の常套句である。したがって、ここでも神の現れは、現実と言うより、夢と同様のある種の幻であることが示唆されているように思える。

さらに、夢に神が現れた場合でも、その神がどんな様子をしていたかはほとんど言及がなく、稀にあっても、事例 25 のように、「美しい少年」、「容姿端麗な若者」などと言われているのみである²。これはエピダウロスの石碑以外の報告にも共通することである。つまり、夢で見たものが何であれ、癒しに関わる夢、あるいは夢を見た後に癒えたとするなら、その夢はアスクレピオスによる夢であることが、アスクレピオスを信じる者たちの間では当然のこととして前提とされていたと考えられる³。このことは、次に検討するガレノスの場合にも当てはまると思われる⁴。

「癒しの事績」には、これらの他にも興味深い事例が多数あるが、割愛して、次にはガレノスのテキストを見てみたい。

2. ガレノスの信仰

ペルガモンで生まれローマで活躍したガレノス(129-?199/216年)は、周知のように、ヒポクラテス以来の合理的な古代医学の伝統を集大成して、解剖学・生理学の基礎を築き、以降 17 世紀に至るまで医学の権威と仰がれた人物である。彼は膨大な量の著作を書いており、その主題は医学の全領域のみならず、哲学、論理学、文献学

¹ IGIV, 1², 122, XXV.

² Cf. IGIV, 1², 121, XIV; XVII; 122, XXXI.

³ Cf. Dodds, *op. cit.*, pp. 109-110.

⁴ ガレノスは、エピダウロスの「癒しの事績」が刻まれてからおよそ 5 世紀も後の人物である。アスクレピオス信仰にも当然、時代や地域による相違を考慮しなければならない。しかし、アスクレピオスの癒しには古代を通じて本質的な変化はなかったというのが、今日大方の研究者の見解であろう。Cf. Edelstein II, p. 144; F. Kudlien, "Galen's religious belief", in V. Nutton, ed., *Galen: Problems and Prospects*, London 1981, p. 118.

その他にも及んでいる¹。彼の後世への影響も、たんに医学の領域にとどまらず、きわめて広範に及んでおり、ヨーロッパとアラビアの思想史において、ガレノスと比肩されるのはアリストテレスくらいだと言ってよい。したがって、ガレノス研究の主題はきわめて多岐にわたり、著作の多さ²とも相まって、いまだ十分に研究されていない分野も多いのだが、ここではあまり注目されることがないアスクレピオス信仰の問題を取り上げたい。

しかし、ガレノスの信仰、あるいはガレノスにおける神を考えると、おそらくまず問題になるのは、アスクレピオスよりもむしろ、この世界を造り出したデミウルゴスとしての神であろう。彼は解剖学・生理学の知識から得られた人体の精妙な合目的性に対する認識から、そのような人体とこの世界を造り上げた神の存在を確信していた。例えば、彼の主著とも言える『人体各部の有用性について』と題する全17巻の大著の中で、彼は人体各部の合目的性を明らかにするという自著の主題を「神聖な議論」と呼び、次のように述べている。

〔1〕デミウルゴスとしての神に対する信仰

私はそれを、我々を造った方に対する真実の讃歌として著述しているものであり、私はこれこそが真に神を敬うことであると信じている。たとえ、その方に盛大な犠牲として何百頭もの雄牛を捧げたり、何万タラントンのシナモンを焚いたりしなくても、その方はどれほど知恵があり、どれほど力があり、どれほど慈愛に満ちているかを、まず私自身が認識し、それから他の人たちにも解き明かすとすんなら³。

デミウルゴスとしての神は、ガレノスにも大きな影響を与えているプラトンの『ティマイオス』で語られて以来、後のプラトニストたちに受け継がれた観念で、ガレノスの当時にデミウルゴスをめぐっては様々な哲学的議論が行われていた。したがって、この神はガレノスの哲学や医学思想を考える上でも重要な問題である。さらには、デミウルゴスとアスクレピオスの関係についても難しい問題があるのだが、ここでは以上のことを指摘するに止めておきたい⁴。

さて、本題であるガレノスとアスクレピオスの関係を話を進めよう。ガレノスの故郷ペルガモンは、当時アレクサンドリアに次ぐ学問の中心地であっただけでなく、今日でもアスクレピオス神殿の遺跡で有名なように、エピダウロスと並ぶアスクレピオス信仰の中心地でもあった。彼がアスクレピオスに対して敬虔な信仰を抱いていたことは、その著作の随所から窺える。ガレノス自身が語るところによれば、そもそも彼が医学の道へと進んだのは、父親が見た夢のお告げがきっかけであったという。

¹ ガレノスの生涯と著作に関する概説としては、cf. 拙論「ガレノスの自己文献解題『自著について』—序論・翻訳・注解—」『明治薬科大学研究紀要』〔人文科学・社会科学〕第28号(1997), pp. 31-60; Nutton, *op. cit.*, pp. 216-222.

² ガレノスの『自著について』と題する一種の自己文献解題には約200の書名が挙げられており、そのうち70余りが現存する。この書に言及されていない著作も相当数あり、今日何らかの形で伝存する著作は100近くになる。しかも、アラビア語訳やシリア語訳のみで伝存するものも相当数あり、いまだ信頼できる校訂版がないものも多い。

³ *De usu partium* III, 10: K. III, 237; Helmreich I, 174. ガレノスの著作の参照箇所を示すには、便宜上 C. G. Kühn ed., *Claudii Galeni Opera Omnia*, Leipzig 1821-33 (K.と略す)の巻数と頁数を付記する。これに収録されていないもの、他の校訂版を使用したものについては、その編者名と頁数を付記する。

⁴ これらの問題については、cf. R. Walzer, *Galen on Jews and Christians*, Oxford 1949, esp. pp. 23-37, 48-56; P. Moraux, "Galien comme philosophe: la philosophie de la nature", in V. Nutton, ed., *Galen: Problems and Prospects*, London 1981, pp. 87-116; Kudlien, *op. cit.*, pp. 117-130; M. Frede, "Galen's Theology", in *Galien et la Philosophie, Entretiens sur l'antiquité classique* XLIX (2003), Genève 2002, pp. 73-126.

〔2〕父の夢によって医学を学び始める

父は私が14歳のとき、哲学に専心するようにと私を弁証法の研究へ導いた。その後、明瞭な夢によって勧告されて、16歳だった私に哲学と同時に医術をも習練するようにさせた¹。

ガレノスはこのエピソードを相当気に入っていたらしく、著作の中で繰り返し述べている²。テキストではアスクレピオスの名は言及されていないが、この夢がアスクレピオスによるものと信じられていたことはほぼ間違いない。「明瞭な夢」という言葉も、先に引用した「癒しの事績」の事例25にもあるように、神的な夢についてしばしば用いられる表現である³。ガレノスが語る夢のお告げは、少なくとも医療の問題に関する限り、すべてアスクレピオスによるものとみなされていたと理解してよいと思われる。また、以下の記述からは、医療の問題以外のことでも、彼は人生の重要な局面においてアスクレピオスのお告げに従っていたことがわかる。

〔3〕従軍の要請を断る

アントニヌスはその後にゲルマン人への遠征にとりかかり、何としても私を連れていこうとしたが、父祖なる神アスクレピオスが反対のことを命じたと私が言うのを聞いて、納得して私を解放してくれた。この神が致命的な症状の膿瘍に罹っていた私を救ってくれたときから、私自身この神の僕であることを宣言していた。彼はこの神に拝礼して、私に自分が帰還するのを待つように命じた⁴。

ガレノスは、アスクレピオスを「父祖なる神(πάτριος θεός)」と呼び、自分をアスクレピオスの「僕(もしくは信者)(θεράπευτής)」だと言っている⁵。さらには、ガレノス自身アスクレピオスによって重病から救われた体験があることも述べている。これも間違いなく夢のお告げであったと考えられる⁶。ちなみに、ここでアントニヌスと呼ばれているのはローマ皇帝マルクス・アウレリウス(在位161-180年)のことで、彼も自著の中で、夢によって薬剤の指示を与えられたことで神に感謝を述べている⁷。また、『人体各部の有用性について』の中では、その難しさからためらっていた研究と著述(眼の構造と視覚の問題)を夢によって促されたことが語られている。

〔4〕夢が研究を促す

そうこうしているうちに、ある夢が私を非難して、私は動物におけるデミウルゴスの摂理のたいなる業を説明せずに等閑に付しておくことで、最も神的な器官(眼)に対して不当な仕打ちをし、デミウルゴスを冒瀆して

¹ *De ordine librorum suorum* 4: K. XIX, 59; Mueller 88.

² Cf. *De methodo medendi* IX, 4: K. X, 609; *De praenotione* 2: K. XIV, 608; Nutton 78; *In Hippocratis de humoribus* II, 2: K. XVI, 223.

³ 以下に掲げる引用文〔10〕〔11〕にも同じ表現がある。

⁴ *De libris propriis* 2: K. XIX, 18-19; Mueller 99 = Edelstein T. 458.

⁵ 以下に掲げる引用文〔11〕〔12〕にも同じ表現がある。

⁶ 以下に掲げる引用文〔11〕を参照。

⁷ Cf. マルクス・アウレリウス『自省録』1, 7.

いと言って、私がやり残したことを再び取り上げ、この議論の最後に付け加えるように仕向けた¹。

さらに、後にも検討するように、ガレノスは夢のお告げによる薬剤や治療法の指示を明らかに肯定している。

3. ガレノスにおける夢

アスクレピオスの癒しが夢を通じて行われることは、先に確認した通りだが、ここで、ガレノスが夢をどのように考えていたのかを確認しておきたい。これには『夢による診断について』と題された彼のごく短い著作を見るのが便利である²。この小論の要点は、以下に引用する著作の冒頭と末尾に明示されている。

〔5〕夢は身体の状態を示す

夢は我々に身体の状態を示す。夢で火災を見る人は、黄胆汁によって悩まされている。煙か霧が深い暗闇を見る人は、黒胆汁によって悩まされている。雨は、冷たい水分が過剰であることを示す。雪や氷や雹は、冷たい粘液が過剰であることを示す³。それゆえ、病んでいる人たちが夢の中で見るものや行っていると思うことは、しばしば我々に体液の不足や過剰や性質を示すであろう⁴。

まず、彼の基本的な立場は「夢は身体の状態を示す」ということである。それゆえ、夢は病気の診断にも役立つわけである。この書ではとくに、夢はいわゆる四体液のいずれかの不足と過剰を示すものとされている。血液、黒胆汁、黄胆汁、粘液という四つの体液のバランスによって、身体と精神の状態が決定されるという観念は、ヒッポクラテスにまで遡る伝統的な考え方であり、ガレノスもこれを継承し発展させた⁵。また、ガレノスは夢を見る理由を次のように説明している。

〔6〕夢の仕組み

つまり、魂は睡眠中に身体の奥底に沈み込み、外部からの感覚から退いて、身体における状態を知覚し、魂が希求するすべてのものの幻影を、現に目の前に存在するものであるかのように、受け取るのだと思われる⁶。

これらは「ヒッポクラテス集典」中の『養生法について』第4巻（別名「夢について」）以来の伝統的な見解に沿ったものである⁷。しかし、ガレノスによれば、夢は身体の状態を示すだけではない。

¹ *De usu partium* X, 12: K. III, 812-813; Helmreich II, 93.

² 本書については、cf. Holowchak, *op. cit.*, pp. 139-149.

³ *De dignotione ex insomniis*, K. VI, 832.

⁴ *Ibid.*, K. VI, 835.

⁵ 体液理論は古代のみならず19世紀に至るまで、西洋医学に大きな影響力を持ち続けた。ガレノスと四体液説については、cf. 拙論「ガレノスのクラーシス論」『科学史研究』第37巻 No.208(1998), pp. 223-228.

⁶ *De dignotione ex insomniis*, K. VI, 834.

⁷ Cf. 『養生法について』IV, 1. この著作については、cf. Holowchak, *op. cit.*, pp. 129-138.

〔7〕予言としての夢

しかし、睡眠中に魂が見る幻影は、身体の状態のためだけではなく、我々が習慣的に日常行っていることにも起因するし、あるものは我々が考えていたことから生じるし、またあるものは魂によって予言のように予め明らかにされる。このことも経験によって証言されている。のだから、身体の診断を身体によって惹起された夢から行うことは難しくなる。というも、もしそれを日常行っていることや考えていることから区別するだけでよかったなら、行われもせず、考えられもしなかったことを、身体から惹起されたものとみなすのに、少しも困難はなかっただろう。ところが、我々はある種の予言的な夢があることを認めているのだから、それらがどうすれば身体によって惹起される夢から区別されるかを言うことは、容易ではない！。

ここで彼は夢を三つに分類している。身体の状態に起因するものの他に、日常の行動や思考に起因する夢がある。これは実際の経験の記憶に基づく夢と言ってよいだろう。さらに第三のものとして、ガレノスは「ある種の予言的な夢」の存在を認めている。これは身体に起因するのではなく、魂によって直接示されるものとされている。この著作では言明されていないが、その夢の原因は何か超自然的なもの、神的なものに求められることになるだろう。アスクレピオスの夢は当然この第三の夢に属する。この著作からも、ガレノスが神による夢のお告げを認めていたことが窺われる。

4. ガレノスにとってのアスクレピオス

さて、以上のように、ガレノスがアスクレピオスの夢のお告げを信じていたということは、彼が科学的医学の確立者であることを思うとき、我々には奇異に写るだろう。しかし、アスクレピオスによる癒しと合理的な医学は、一般的に言って、古代においてはけっして対立・敵対するものではなく、むしろ相補的なものとして共存していた。エピタウロスでは定かではないが、地域や時代によっては、医師が神殿で治療に従事していたと思われる場合や、司祭自身が医師であった場合もあり、医師による奉納品も出土している²。

そこで、ガレノスも夢のお告げやアスクレピオスが行ったとされる治療を無批判に信じていたというのが一般的な見解のようである³。当時は確かに様々な点で宗教的、非合理主義的傾向の強い時代であった⁴。オリエントの宗教思想の影響を受け、様々なオカルト思想、ヘルメス主義やグノーシス主義、占星術が流行っていた。哲学の分野でも、新ピタゴラス派や、後の新プラトン主義を準備する中期プラトニズムが興り、神秘主義的な傾向を強めていた。他方では、キリスト教が着々と広まりつつあった時代でもある。当時の人たちにとって神の存在は、現代の我々には容易に想像もつかないほど大きなものであったと思われる。

しかし、もちろん古代人すべてがアスクレピオスの奇跡を信じていたわけではない。夢のお告げに批判的であっ

¹ *De dignotione ex insomniis*, K. VI, 833.

² 信仰治療と合理的医学の共存については、cf. Holowchak, *op. cit.*, pp. 168-169; Nutton, *op. cit.* pp. 103-114.

³ Cf. J. Ilberg, "Aus Galens Praxis", *Neue Jahrbücher für das klassische Altertum* 15(1905), p. 279; Edelstein II, p. 118, 147; Holowchak, *op. cit.*, p. 169. これに異を唱えるものとしては、cf. Kudlien, *op. cit.*, pp. 117-130.

⁴ Cf. Dodds, *op. cit.*, pp. 247-249.

た医師や思想家も存在した。すでにアリストテレスは「神が夢を送る」という伝統的な考えを否定している¹、キケロはあからさまにアスクレピオス信仰を批判している²。2世紀初頭にローマで活動した医師、エペソスのソラノスは、夢や宗教儀礼に引きずられて本来の医学的な処置がなおざりにされることに警鐘を鳴らしている³。

ガレノスがアスクレピオスによる治療と言われるものを、本当にすべて無批判に信じていたのかどうかは、おおいに検討の余地がある。というのも、次に引用するように、「自然的に不可能なこと」は世界を創造した神にとってさえなしえないと考えていたガレノスが、まったくの奇跡に類するようなことまでをすべて盲目的に信じていたとは、とても思えないからである。

〔 8 〕 自然的に不可能なことは神にも不可能

だが実際、あることは自然的に不可能なことであり、それらのことには神でもまったく手をつけようとはせず、むしろ神は可能なことの中から最善のことが生じるのを選ぶのだ、と我々は言おう⁴。

ガレノスのテキスト自体をあらためて検討してみる必要がある。そこで、彼が語っている夢のお告げ、もしくはアスクレピオスによる治療のうち、その治療法が具体的に述べられている箇所を以下に列挙する⁵。

〔 9 〕 夢のお告げによる薬剤治療

別の裕福なある男は夢に勧告されてペルガモンへとやって来た。すると、神が夢の中で、毒蛇から作った薬を毎日飲み、そして外部からも身体に擦り込むようにと彼に命じたところ、その疾患はたいした日数もたたないうちにレブラに変わり、これも再び神が命じた薬によって治癒した。これらの体験が勧めるところに従って、我々は恐れることなく毒蛇から作った薬をおおいに、神が告げた仕方に従って使用し始めたのである⁶。

〔 10 〕 夢による薬剤の指示

しかし、夜の間に彼にきわめて明瞭な夢が現れ、私の忠告を称賛し、薬の材料を指定して、レタスの汁で洗浄するように命じた⁷。

〔 11 〕 夢のお告げによる瀉血

さて、私が何から促されて動脈の切開へとたどり着いたのか、今やあなたに話そう。私に生じたある夢——そのうち二つは明瞭だった——によって勧告されて、私は右手の人差指と親指の間にある動脈へたどり着き、血

¹ Cf. アリストテレス『夢占いについて』2, 463 b 12-22.

² Cf. キケロ『神々の本性について』III, 91, 『占いについて』II, 123.

³ Cf. Soranus, *Gynaecologia* I, 2, 4: Ilberg 5.

⁴ *De usu partium* XI 4: K. II, 906; Helmreich II, 159.

⁵ *De morbo differentiis* 9(K. VI, 869 = Edelstein T. 459)でも、アスクレピオスが難病を癒したことが語られているが、治療法には言及されていない。

⁶ *Subfiguratio empirica* 10: Deichgraber 78 = Edelstein T. 436.

⁷ *De methodo medendi* XIV, 8: K. X, 972.

液が自然に止まるまで流れるに任せた。夢がそのように命じていたからだ。1リトラ（約 327.5g）も流れ出ることはなかった。すぐに長期にわたる痛みが止まった。その痛みはとくに肝臓が横隔膜と出会う部分に位置していた。このことは私が若かったときに起こった。ペルガモンの神（アスクレピオス）の僕（ガレノス）は、長期にわたる脇腹の痛みから、手の端で行われた動脈切開によって解放された。彼（ガレノス）も夢からこのことにたどり着いたのだ¹。

〔12〕精神の治療法

そして少なからぬ人たちが、魂の性質によって長年病んでいたのだが、我々は彼らを情動の不均衡を正すことによって健康にした。我々の父祖なる神アスクレピオスも、この話のけっして小さくない証人である。この神は少なからぬ人たちに頌歌や笑劇や何らかの歌を作ることを命じた。彼らにとって（魂の）気概的部分の情動が激しくなったことは、身体の混合（体内における温冷乾湿のバランス）を必要以上に熱くしたからである。また、少なからぬ他のある人たちには、狩りや乗馬や重装備での戦術訓練を命じた。同時に、狩りを命じた人たちには、狩りのうちでもある種類のものを指定し、また武具を使った運動をするように命じた人たちには、武具の種類を指定した。なぜなら、神は、彼らの弱まっていた気概的部分を喚起しようとしただけでなく、運動の種類によって尺度を定めようとも欲したからである²。

〔13〕禁飲の指示

このように、ペルガモンにおける我々のもとでも、神によって治療されている人たちは、神がしばしば15日間何も飲んでではないと指示したとき、神の言うことに従うのを我々は見ている。医師がそれを指示したなら、彼らはどんな医師にも従わないのに³。

〔9〕〔10〕〔11〕は、いずれの場合にも、夢の中で治療法の指示が与えられ、それに従って治療を行ったところ、病気が治癒したことが語られている。〔9〕にあるような毒蛇を薬剤に用いることは、ガレノスに限らず一般に行われていたことであり、ある病気を一旦、別の病気に転じることも、ヒポクラテス以来、有効な治療法として用いられていたことである。〔11〕では、ガレノス自身が夢のお告げに従って自分の動脈を切開し、苦痛から救われた体験が語られている。動脈の切開とはいわゆる瀉血のことで、それが有効な治療法であることはガレノス自身が力説している。彼は瀉血に関して、少なくとも四つの著作を書いている。ちなみに、先の引用文〔3〕で「神が致命的な症状の膿瘍に罹っていた私を救ってくれた」と言っているのは、この出来事を指していると考えられる。

〔10〕の夢はガレノスではなく、彼の患者が見た夢であるが、ガレノスが自分の治療法の正さを確認するために挙げている逸話である。〔12〕は身体の病気ではなく精神の治療を述べたものだが、ガレノスはみずからの治療法が正しいことの裏づけとして、アスクレピオスが（おそらく夢のお告げによって）指示した療法を引き合いに出している。

¹ *De curandi ratione per venae sectione* 23: K. XI, 314-315.

² *De sanitate tuenda* I, 8: K. VI, 41-42; Koch 19-21 = Edelstein T. 413.

³ *Commentarius in Hippocratis Epidemias* VI, 4, section IV, 8: K. XVIIIb, 137 = Edelstein T. 401.

〔13〕は、患者に指示を守らせるためには、指示に従えば必ず治癒することを患者に納得させることが大切だという文脈で述べられたものである。「15 日間何も飲んでではならぬ」という指示は非現実的にも思えるが、ガレノスが言いたいことは、同じ処方であっても、神には従うが医師には従わない者がいるということである。

ガレノスがアスクレピオス（もしくは夢）による治療として述べているものの中には、「癒しの事績」に見られるような奇跡に類するものは一つもない。また、指示された治療法というの、現代の我々には一見奇異に思われるかもしれないが、少なくともガレノスにとっては、けっして不合理なものではなく、医術の理に適った治療であったと言える。

さらに、ガレノスは場合によっては夢のお告げを治療に用いることを批判してもいる。経験派（エンペイリコイ）と呼ばれる医師たちのことを批判する文脈で、彼らは何の技術も理論もなしに夢のお告げを治療に用いていると言っていて非難している¹。このことから、ガレノスが、夢のお告げによる治療をすべて無批判に信じていたのではないことがわかる。

以上のことから、当時多くの人によって信じられていたアスクレピオスによる治療と称するものを、ガレノスがすべて無批判に受け入れていたという見解は誤っていると言える。確かに、ガレノスが当時一般に信じられていた神殿治療やアスクレピオスによる奇蹟的な治療の話に対して、少なくともあからさまな批判をしている記述は見当たらない。さらに、ガレノスがアスクレピオスに対して真に敬虔な感情を抱いていたことも、疑うべきではないだろう。しかし、ガレノスはアスクレピオスを無批判に信じていたというより、むしろ、自らの医学理論に合致する限りで、アスクレピオスによる治療をも信じていた、と言うべきである。

ガレノスが語るアスクレピオスは、けっして超自然的な奇跡によって病気を癒す神ではなく、医師や患者に夢の中で正しい治療法を教えてくれる神なのだ。ガレノスのアスクレピオスに対する信仰は、一見すると彼のデミウルゴスとしての神の觀念に反すると思われるかもしれないが、このように見ていくと、むしろ合致していることがわかる²。つまり、ガレノスにとっては、アスクレピオスもデミウルゴスと同様、「自然的に不可能なこと」をなす神ではなく³、「自然的に可能なこと」の中から最善の治療法を教えてくれる神だと言えるだろう。あるいは、見方を変えるなら、ガレノスにとって、アスクレピオスは自らの理論と治療法に確証を与えてくれる神であったと言ってもよさそう。そしてまた、ガレノス自身が求めていたのがそのような神であったと言えるかもしれない。

以上の考察が正しいとするなら、このことはガレノスの人柄と考え合わせるとき、興味深いものがある。ガレノスは、その著作を読む限り、傲慢とも言えるほどの自信家で、自らの医学理論と治療法に絶大な自信を抱いていたことが窺われる。つまり、もしガレノスの深層心理を推測することが許されるとするなら、ガレノスはたいへんな自信家であったにもかかわらず、あるいはむしろそうであったがゆえに、無意識の中では、神によって自分の理論と治療法に御墨付を与えてもらうことを切に求めていたのではないだろうか。

¹ Cf. *De sectis ad ingredientis* 2: K. I, 66; Helmreich 3.

² Frede, *op. cit.*, pp. 90-92, 104-107 は、ガレノスはアスクレピオスをデミウルゴスとしての神と同一視していたと論じている。

³ *De sanitate tuenda* I, 12(K. VI, 63; Koch 15 = Edelstein T. 473)では、生来の体質が悪い人は、たとえアスクレピオスに託したとしても長生きできないと言われている。

